



# 営農NEWS



## トマトのウイルス病を媒介する微小害虫の対策

近年、トマトのウイルス病として「黄化葉巻病」、「黄化えそ病」、「黄化病」や「各種のモザイク病」が発生し、その被害が問題となっています。

これらのウイルス病は、病原ウイルスや媒介昆虫または伝染方法が異なるものの、病徴として類似している時期があったり、また苦土など微量元素欠乏症とも類似するものがあるなど、病徴の観察だけでは病名を判断するのが困難な場合もあり、現場では混乱を招く場面が多々あります。

黄化葉巻病はタバココナジラミが媒介し、黄化えそ病はアザミウマが媒介、黄化病はタバココナジラミ及びオンシツコナジラミが媒介します。モザイク病はアブラムシが媒介する各種ウイルス病と、土壌伝染するウイルス病があります。

これらウイルス病の媒介虫はいずれも微小な害虫で、育苗中や圃場内での発生量を十分に確認することが難しいことから、下記を参考にして、耕種的や物理的防除と薬剤防除を組み合わせた総合防除で対応する必要があります。また、ウイルス病対策は発病前からの徹底した防除に努め、産地として生産者全体で、一斉に取り組むことが重要になります。

### <防除対策のポイント>

微小害虫を防除する基本としては、栽培施設に害虫を①入れない、②そこで増殖させないことが重要です。

①施設に入れない対策として、出入口や天窓・側窓など開口部に防虫ネット（タバココナジラミには目合い0.4mm）を設置します。また、害虫の飛来源、ウイルスの保毒源となる雑草等があれば、常に除草を徹底してください。**育苗中は特に注意**し、外からの感染株の持込や微小害虫の侵入などを注意深く遮断することが必要です。

②増殖させない対策としては、常に作物を観察して早期発見に努め、発病株の抜き取りや早期防除を行います。なお、施設内に青色や黄色の粘着トラップを設置して微小害虫を誘引し、密度の抑制を図るほか、薬剤防除時期の目安にします。薬剤の選択は、作期全般における総使用回数を考慮して選択し、また抵抗性害虫の出現を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

さらに、栽培が終了したら③害虫が施設から逃げ出す前に、蒸し込み処理などで死滅させることが重要で、この処理により周辺ハウスや雑草への飛散防止、次作での侵入抑制効果が期待されます。

表1 トマトとミニトマト コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の主な防除薬剤（平成 29 年 11 月 7 日現在）

薬剤名	コナジラミ類	アザミウマ類	アブラムシ類	使用量または希釈倍率	使用時期／使用回数
ベリマークSC	○	○	○	25ml/400株（水10～20ℓに希釈して25～50ml/株）灌注	育苗期後半～定植当日／1回
ベストガード粒剤	○			1～2g/株 株元処理 または 1g/株 株元処理	育苗期／1回
			○	または 1～2g/株 植穴処理土壌混和	定植時／1回
	○			または 5g/培土1ℓ 育苗培土混和	播種時又は鉢上げ時／1回
				または 50g/セルトレイ等※ 散布	育苗期後半／1回
スタークル顆粒水溶剤	○			100倍 0.5ℓ/セルトレイ等※ 灌注	鉢上げ時又は定植時／1回
	○			2,000～3,000倍	収穫前日まで／2回以内
モベントフロアブル		○		1,000倍 50ml/株 灌注	育苗期後半／1回
	○		○	または1,000倍 25～50ml/株 灌注	
ウララDF	○	○ミカ		2,000倍	収穫前日まで／3回以内
			○	2,000～4,000倍	
コルト顆粒水和剤	○		○	4,000倍	収穫前日まで／3回以内
コロマイト乳剤	○			1,500倍	収穫前日まで／2回以内
ディアナSC	○			2,500倍	収穫前日まで／2回以内
		○		2,500～5,000倍	
アニキ乳剤	○	○ミカ		1,000～2,000倍	収穫前日まで／3回以内
コテツフロアブル		○ミカ		2,000倍	収穫前日まで／3回以内

注) 1. 表中のアザミウマ欄、ミカンはミカンキイロアザミウマの農薬登録です。

2. ※印は、セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ）を略しました。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040